Ⅰ．ロメオとジュリエットの物語その成立

シェイクスピア「ロメオとジュリエット」の原作について

現代人は主としてシェイクスピアの古今最高の恋愛悲劇によって
ロミオとジュリエットの崇高な悲恋物語に親しんでいるが、それを
主題にした文学作品や説話類はイタリアを中心に多数存在している。
［シェイクスピア劇のオペラを楽しもう］

シェイクスピアの名作悲劇自体も彼の全くの創作ではなく、彼のほとんどの劇に材源があるのと同じように、彼の『ロミオとジュリエット』にも種本がある。それはイタリアの作家 ***マッテオ・バンデッロ***（1485-1561）の『物語集』の英訳版の中のロミオとジュリエットの悲恋物語を材料にしてイギリスの詩人アーサー・ブルックが書いた教訓物語詩『ロミウスとジュリエットの悲劇的物語』（1562）である。

［シェイクスピア劇のオペラを楽しもう］

原作の作家について

バンデッロ、マッテーオ(1458-1561)

短編物語作家。ドミニコ会修道士。生地ロンバルディーア地方の諸名家の秘書役を務め、1550年からはフランス、アジャンの司教となる。・・・彼は自然、雰囲気、状況を身近に観察し、的確に動機や感情を把握することに努めた。彼の物語のうち、とくに人を驚かせた作品は、デッラ・ポルタ、グロート、シェイクスピア、マッシンジャーなどの劇作家たちに取り上げられ、原典から直接、あるいはベルフォレ、ペインター、フェントンの翻訳を通して戯曲化された。　［イタリアルネサンス事典］

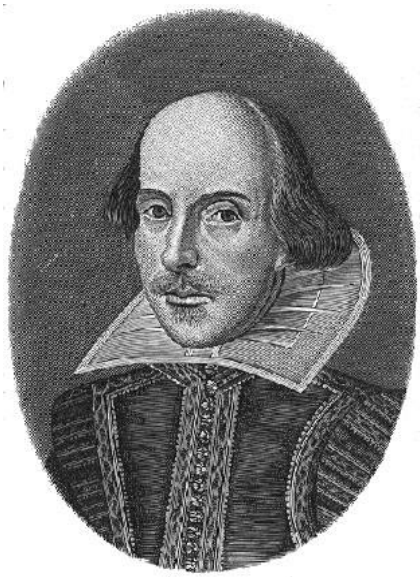
原作とシェイクスピアとの違い

主な材源は、教訓的意図が強く、不純な欲望に盲従することをいましめ、両親には従うべきことを説く。劇化にあたってシェイクスピアは、この道徳臭を一掃すると同時に、マーキューシオなど副人物を強力に拡大し、また原作では事件が9カ月間のこととなっているのを、わずか5日間の出来事に圧縮して、悲劇的緊迫感を圧倒的に高めている。

［シェイクスピア辞典　研究社］

Ⅱ. シェイクスピアの「ロメオとジュリエット」

図書の挿絵



シェイクスピア

William Shakespeare 1564-1616

イギリスの詩人、劇作家

故郷のストラトフォード・オン・エーヴォンを1585年に去り、ロンドンで演劇人として活動し、劇作を始め、1603年ジェームズ1世の即位のころには、当代随一の人気と尊敬を集める作家となった。1611年頃故郷に戻り、ここで生涯を終えた。1591年の「ヘンリー6世」から、1612年の「ヘンリー8世」まで37編の戯曲が現存する。「ロメオとジュリエット」は1595年に創作されたと推定される。

また詩人としては、154編のソネットからなる「ソネット集」(1609)が、イギリス詩史を通じて最も高い芸術性をもつ傑作の一つとみなされている。日本へは明治の初めごろ紹介された。　［平凡社　世界大百科事典より］

シェイクスピア　戯曲 <ロメオとジュリエット Romeo and Juliet>

モンタギュー家

モンタギュー・・・・・・キャピュレット家と争う
ヴェローナの名家の家長
モンタギュー夫人・・モンタギューの妻で
ロメオの母
ロメオ・・・・・・・・・・モンタギューの息子
ベンヴォリオ・・・・・・モンタギューの甥で
ロメオの親友
アブラハム・・・・・・ モンタギューの召使
バルサザー・・・・・・ロメオの召使

キャピュレット家

キャピュレット・・・・・・モンタギュー家と争う
ヴェローナの名家の家長
キャピュレット夫人・・キャピュレットの妻で
ジュリエットの母
ジュリエット・・・・・・・・キャピュレットの娘
ティボルト・・・・・・・・・・キャピュレット夫人の甥
乳母・・・・・・・・・・・・・・ジュリエットの乳母

エスカラス・・・・・・・・・・・・・ヴェローナの大公
パリス　・・・・・・・・・・・・・・ 大公の縁者の若い貴族
マーキュシオ・・・・・・・・・・ 大公の縁者でロメオの友人
ロレンス修道士・・・・・・・・ フランシスコ会の修道士
薬屋　・・・・・・・・・・・・・・・・・ マンチュアの薬屋

[シェイクスピア作品・人物辞典　研究社]

あらすじ

ヴェローナの名門モンタギュー家とキャピュレット家の間には、長い間反目が続いている。モンタギューの息子ロメオとキャピュレットの娘ジュリエットは、一目で恋に落ち、修道僧ロレンスの計らいで密かに結婚式をあげる。その帰り道で、ロメオはジュリエットの従兄ティボルトを売られたけんかがもとで刺し殺して、大公に追放の宣告を受ける。一夜をジュリエットの部屋で明かしたロメオはマンチュアへ旅立つ。その直後、ジュリエットはパリス伯との結婚が両親によって取り決められ、それから逃げるために彼女は、ロレンスの指示に従って仮死状態になる薬を飲み、翌日死体となって墓地に安置される。その間ロレンスはロメオに真実を知らせようとして失敗する。墓地に来たロメオは、ジュリエットが死んでいるものと思って毒を飲む。目覚めたジュリエットもあとを追って自殺する。ロレンスから真相を聞いたモンタギュー、キャピュレット両夫妻は悲劇の原因が自分たちにあるのを知り、和解する。

[平凡社世界大百科事典・研究社シェイクスピア事典　参照]

舞台となった町ヴェローナにある
ジュリエットの家のバルコニー

シェイクスピアと音楽

これといった舞台装置もなく、照明等もなかった当時の芝居の中で、シェイクスピアはそのドラマの展開に音楽の力を十分計算した上で活用したのだった。そこに用いられた音楽の多くは、当時の観客がよく知っていたものであったと考えられるが、シェイクスピアはそれを場面や状況に応じて、時には歌詞の一部を変え、またパロディ化したりして巧みに使いこなしたのである。

シェイクスピア時代のイギリス音楽

シェイクスピアが生きたイギリスは、文学のみならず、音楽の面でも俗に「黄金時代」と呼ばれる絢爛たる時代であった。**ウィリアム・バード**、**トマス・モーリィ**、**ジョン・ダウランド**らをはじめとする多数の優れた音楽家達が輩出し、教会音楽や世俗音楽に数々の名曲を残したが、中でも、この時代を特徴づけているのは、その多彩な世俗音楽の世界であろう。そこには、マドリガル、リュート歌曲といった芸術性の高いものから、一般庶民にも広く愛されたキャッチ、ラウンドなどの声楽曲、さらに、リュートやヴァージナルなど、当時人気のあった楽器の為の作品にいたるまで、多彩な様式の音楽が豊富に生み出され、この時代のエネルギーに満ちたイギリス音楽の姿を今日に伝えてくれるのである。

バード　Byrd, William
（1540頃-1623）

モーリィ　Morley, Thomas
（1557/58-1602）

ダウランド Dowland, John
（1563-1626）

[シェイクスピアの音楽]

Ⅲ.「ロメオとジュリエット」音楽作品年表

シェイクスピアの悲劇『**ロメオとジュリエット**』は、彼の初期の作品であり、必ずしも高度の芸術性を備えた文芸作品とはいえないが、その情緒的内容の深さがきわめて音楽的であるために、今まで多くの作曲家たちによってさまざまな形の作品化　－付随音楽、歌曲、ピアノ曲を含め－　がなされた。オペラでも実に14曲を数え、交響曲もいくつか残っている。

［最新名曲解説全集より］

＊1882　ラフ

＊1876　スヴェンセン

＊1869　チャイコフスキー

＊1867　グノー

＊1595頃

ロメオとジュリエット

＊1839　ベルリオーズ

＊1836　マクファーレン

＊1830　ベッリーニ

＊1825　ヴァッカイ

＊1776　ベンダ

1600　1700　1800　1900

ルネッサンス　バロック　古典派　ロマン派　後期ロマン派　近代　現代

＊1900　ディーリアス

＊1921　プーランク

＊1926　ランバート

＊1935　プロコフィエフ

＊1943　ブラッハー

＊1950　マリピエロ

＊1956　カバレフスキー

＊1957　バーンスタイン

＊1968　ロータ

1750年から現代にいたるまで、90人以上の作曲家たちの作品がある。（"Kompendium der musikalischen Sujets" より）
ここでは、資料を所蔵している作曲家のみを年表化した。

Ⅳ. シェイクスピアの「ロメオとジュリエット」を題材とした音楽作品

ベルリオーズ作曲
劇的交響曲＜ロメオとジュリエット　Romeo et Juliette＞作品17

合唱、独唱、および合唱によるレチタチーヴォのプロローグつき劇的交響曲

1839年11月24日初演　　パガニーニに献呈

構成

第1部　序「争い、騒動、領主の仲裁」

第2部　「ロメオただひとり、憂鬱、音楽会と舞踏会、キャピュレット邸の饗宴」

第3部　「愛の場面　ほの暗く静寂な夜のキャピュレット家の庭園」

第4部　「愛の妖精の女王マブ」

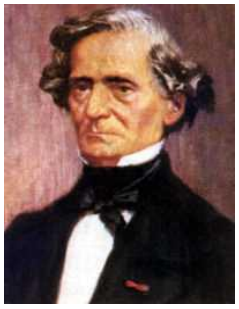
作曲の経緯

1838年の暮に、コンセルヴァトアールの演奏会で、「幻想交響曲」そのほかを、みずから指揮する機会を得た。この演奏会はたいへんな成功で、パガニーニはその演奏を聴いて大いに感激し、翌日はベルリオーズに宛てて「ベートーヴェンは死にました。ふたたび彼に命を与える者はベルリオーズその人よりほかにありません」という有名な言葉ではじまる手紙を書き送った。・・・「天才の味方を得て」力づいたベルリオーズは十年来心のうちに抱いていた「ロメオとジュリエット」の音楽を書くことに心を決め、1839年1月末から作曲にとりかかった。［最新名曲解説全集より］

ベルリオーズとベッリーニのオペラ

「ロミオとジュリエットの悲恋物語」は、主としてシェイクスピア劇によって知られている。そのために、ベッリーニの名作オペラ『カプレーティ家とモンテッキ家』(1830)の原作が、シェイクスピア劇だと誤解されることが稀れではない。ベルリオーズは1831年にフィレンツェでこのオペラを聴いて、これがシェイクスピア劇と非常に違っていることに衝撃を受け、これを酷評したと伝えられている。［二百年の師弟　ヴェルディとシェイクスピア］

この作品に対してベルリオーズは激しい嫌悪（第2幕の終わりでのユニゾンによるパッセージは例外で、それについて彼は『回想録』の中で「忘れられない」と語っている）を抱き、シェークスピアの劇に曲を付けて、交響曲を書いた。［オックスフォード　オペラ大事典］



ベルリオーズ　Berlioz, Hector
（1803-1869）

グノー作曲
オペラ ＜ロメオとジュリエット　Romeo et Juliette＞

5幕 1867年4月27日初演　パリ、テアトロ・リリック

時 ･････････････ 16世紀
場所 ･････････････ ヴェローナ
原作 ･････････････ シェイクスピア
台本 ･････････････ ジュール・バルビエ、ミシェル・カレ

モンタギュー家

ロメオ･････････････モンタギュー家の息子
ベンヴェーリオ ･･････ロメオの友人、モンタギューの甥
メルキューシオ･･････ロメオの親友

キャピュレット家

キャピュレット･･････キャピュレット一族の家長
ジュリエット･････････キャピュレットの娘
ジェルトリュード ･･････ジュリエットの乳母
ティバルト ･････････キャピュレットの甥

ヴェローナ公 ･････････････ ヴェローナを統治する領主
パリス　･････････････････ヴェローナ公の親族に当る若い貴族
ローランス神父　････････ フランシスコ派会の修道士

あらすじ

原作に基いている。

原作とオペラとの大きな異動のひとつに、カタストロフの処理がある。シェイクスピアではいうまでもなく、ジュリエットが眠り薬を飲んだことを知らずに、彼女が死んでしまったものと歎き悲しんだロメオが、ひそかに買い求めた毒薬をあおって息絶えたあと、42時間の眠りからさめたジュリエットがその場に恋人の死骸を発見し、自らもロメオの短剣で自害して、彼のあとを追う。しかし、*オペラでは、ロメオは毒薬を飲むが、まだ毒が身体に廻らないうちにジュリエットが蘇生し、二人で思いがけぬ喜びの抱擁をかわしたあとで、ようやくロメオが毒をあおいだことを告げる、という運びに変っている。*これは、19世紀フランス・オペラの慣習として、フィナーレに主人公の二重唱（大部分の場合、愛の二重唱）を置くのが常識だったために、それにしたがった改変である。

[高崎保男 CD解説より]

グノーのオペラのなかで、最も目覚ましい成功をおさめた作品となった。フランス各地と国外からの多数の見物客が押し寄せた1867年のパリ万国博覧会の開催中に発表されたため、劇場は、連夜、大入り満員となった。

[新グローヴ オペラ事典]

グノー Gounod, Charles-François
(1818-1893)

チャイコフスキー作曲
幻想序曲 ＜ロメオとジュリエット　Romeo and Juliet＞

1870年3月初演　　バラキレフに献呈

作曲の経緯

1869年の夏、バラーキレフがモスクワへやってきた。チャイコーフスキイと彼とは遠くまで散歩にゆき、音楽について大いに語り、活発に論議した。ある時、バラーキレフは、彼独特の熱心さで、チャイコーフスキイに、シェークスピアのもっとも有名な悲劇の一つ『ロメオとジュリエット』への序曲を書くように説得しはじめた。・・・チャイコーフスキイは序曲の作曲に同意した。他の作品のときと同様、彼は早速新しい構想に熱中し、作曲に全力をあげた。11月にはもう序曲が完成され、バラーキレフへ送られてきた。

『ロメオとジュリエット』は、チャイコーフスキイの創作の中でももっとも輝かしく、典型的な作品の一つである。チャイコーフスキイは弟への手紙に「私はこの悲劇を音楽に置き換えるために生まれてきたかのようです。私の音楽的性格にこれ以上似合っているものはありません」と書いた。

[ロシア音楽史より]

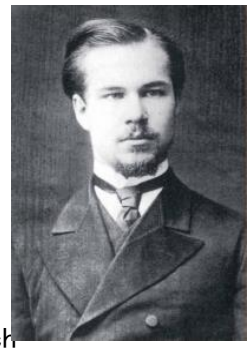
タネーエフに引き継がれた作品

1878年、チャイコフスキーは、再び『ロメオとジュリエット』の主題に戻って、この主題からオペラ作品を作ろうと意図した。完成することのなかったこの計画の草稿から、1895年、作曲者の死後に彼の弟子であるS.タネイエフによって完成され、出版された2重唱のみが残されている。

[ラルース世界音楽作品事典より]

チャイコフスキー Tchaikovsky, Peter Ilich
(1840-1893)

バラキレフ
Balakirev, Milii Alekseevich
(1837-1910)



タネーエフ
Taneev, Sergei Ivanovich
(1856-1915)

プロコフィエフ作曲
バレエ音楽 ＜ロメオとジュリエット　Romeo i Dzhuletta＞作品64

1940年1月11日バレエ初演　キーロフ劇場

このシェイクスピアの悲劇は、記録によればE.ルッツィ（ヴェネツィア、1785）やガレオッティ（音楽クラウス・ショール、デンマーク・ロイヤル・バレエ、1811）が初めて舞台にかけて以来、何十人もの振付家たちの創造意欲を鼓舞してきた。20世紀の最も重要な作品は**プロコフィエフ**が作曲した3幕のバレエ音楽で、その豊かな響きと細かな語りが非常に強力な劇的構造を与えている。バレエの台本はシェイクスピアの筋書きに忠実に従いつつ、二つの争う家族の衝突と、恋人たちの墓前における両家の最終的な和解を強調する。

［オックスフォード　バレエダンス事典］

バレエ初演の前に交響的組曲として初演され、大好評を博した

第1組曲
1936年初演

1. フォーク･ダンス
2. 情景
3. マドリガル
4. メヌエット
5. 仮面舞踏会
6. ロメオとジュリエット
7. タイボルトの死

第2組曲
1937年初演

1. モンタギュー家とキャピュレット家
2. 少女ジュリエット
3. 僧ローレンス
4. 踊り
5. 別れの前のロメオとジュリエット
6. アンティル列島から来た娘たちの踊り
7. ジュリエットの墓の前のロメオ

［最新名曲解説全集より］

プロコフィエフ　Prokofiev, Sergey
（1891-1953）

バーンスタイン作曲
ミュージカル ＜ウェストサイド物語　West side story＞

2幕 1957年作曲、8月19日初演 ナショナル劇場　1961年映画化

時 ･････････････ 1950年代
場所 ････････････ ニューヨークの下町ウェスト･サイド
台本 ････････････ スティーヴン･ソンダイム
（シェイクスピアの悲劇『ロメオとジュリエット』を題材にした
アーサー･ローレンツの著作に基づく）

[オックスフォード　オペラ大事典]

ジェット団

リフ･･････ジェット団のボス
トニー･････････元ジェット団員

シャーク団

ベルナルド･･････シャーク団のボス
マリア････････ベルナルドの妹

あらすじ

イタリア系の不良グループ「ジェット団」と、新顔のプエルトリコ移民の不良グループ「シャーク団」は対立していた。「ジェット団」は兄貴分のトニーに応援を頼むが、トニーはダンスパーティーの場で敵のボス、ベルナルドの妹マリアと一目で恋に落ちてしまう。

両者が決闘することを知ったマリアは、愛するトニーにやめさせるよう懇願。トニーは仲裁に入るが、抑えることができない。「ジェット団」のボス、リフがベルナルドに刺されるのを目のあたりにして、トニーはそのベルナルドを殺してしまう。兄を殺されたマリアだが、トニーへの愛は見失わない。

二人は駆け落ちを決意するが、マリアが死んだという話を聞かされたトニーはやけになり、街をさまよう。そして偶然の再会、二人は駆け寄るが、そこに「シャーク団」の銃口が火を吹く。

[一冊でわかるミュージカル作品ガイド100選]

1957年8月20日

昨晩の初公演はわれわれが夢みていた通りのものになった。苦しみも、日延べも、何度も、何度も、何度にもわたる書きなおしも、すべてその甲斐があったことがわかった。ブロードウェイで最終的な成功を収めるか否かは別にしても、われわれがここ何年かの間、夢みてきていたことが実際に可能だという確信を得るに至った。愛と憎しみの対立という深刻な主題に基づいた悲劇であるばかりか、死、人種問題、若い役者、「純」音楽、複雑なバレエなど、劇作品に含めるには危険な要素を取り入れたのにも関わらず、評論家、観衆両者にとって意味をなす作品となったからだ。

[CD解説　バーンスタイン日記よりの抜粋]

V. バンデッロの「ロメオとジュリエット」を題材とした音楽作品

ベッリーニ作曲
オペラ＜カプレーティとモンテッキ I Capuleti e i Montecchi＞

2幕　1830年3月11日初演　ヴェネツィア・フェニーチェ座

時 ･････････････ 13世紀
場所 ･････････････ ヴェローナ
原作 ･････････････ **マッテオ・バンデッロの第9作『ノヴェッラ』**
台本 ･････････････ ロマーニ （ヴァッカイのために書いた台本をベッリーニのために手を加えたもの）

モンテッキ家

ロメオ･････････････ モンテッキ家当主

カプレーティ家

カペッリオ･･････ カプレーティ家当主
ジュリエッタ･････････ カペッリオの娘
テバルド ･････････････ ジュリエッタの婚約者
ロレンツォ ･････････････ カプレーティ家の医者

あらすじ

モンテッキ家の当主ロメオとカプレーティ家の当主カペッリオの娘ジュリエッタが、両家が宿敵の間柄にもかかわらず、愛し合う物語である。

ロメオはカペッリオの息子を殺したので、テバルドはその仇を取ることができれば、ジュリエッタとの結婚が約束される。ロメオは自分とジュリエッタとの結婚によって、両家の和解をもくろむが、カペッリオはその考えを拒絶する。

ロメオは、自分と駆け落ちするようにジュリエッタを説得することができずに、力ずくで彼女をさらおうとするが、そうこうするうちに捕えられる。ジュリエッタは死んだように見せかける眠り薬を、カプレーティ家の医者ロレンツォからもらう。

ロレンツォはカペッリオに捕えられ、この計画をロメオに話すことができない。ロメオとテバルドが決闘しようとしていると、ジュリエッタの死の知らせが届く。ロメオは毒をあおり、ジュリエッタは目覚めて、恋人が死んでいるのを見て、悲しみのあまり自殺する。

[オックスフォード　オペラ大事典]

ベッリーニ　Bellini, Vincenzo
（1801−1835）